
Angel Beats!

雨宮歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats!

【Nコード】

N7762Y

【作者名】

雨宮歩

【あらすじ】

死後の世界。そこは生きているときに遣り残したこと、未練を残して死んでいった者が生きる世界。

というわけでこの話は原作の数年前、「死んだ世界戦線」が作られたころの話から音無君の登場までをオリジナルに作っていく予定でしたがいろいろやりたくなったので、音無君を登場させて消していきます。

原作崩壊がお好きでない方は見ないことをお勧めいたします。

すべての始まり

あのときまではいいい姉ちゃんであいられた。その自信もあった。だけど……だけど……

「中村、おい中村。起きないか、授業中だぞ」

私は教師の声で目が覚める。確か今は……国語の授業だった気がする。担当教師の朗読が始まってすぐ寝ちゃったんだっけ。でもあの夢は一体……何だったんだろう。ひどく見覚えのある光景だったけど……思い出せないや。

「なんだ、顔色が悪いな。おい遊佐、中村を保健室まで連れて行ってやれ」

「わかりました」

遊佐と呼ばれた少女は機械的にそれだけ答えると、私を引っ張って教室の外へ出た。そして教室から少し歩いたところで彼女がいきなり口を開いた。

「ところで、あなたの名前は？ 話をまったく聞いていませんでしたのでわからないのですが」

「え、じゃあどうしてわかりましたなんて答えられたのよ」

「あの場の空気がそうだったからです。空気を読んだというやつです」

「…ふうあまり聞いてもしょうがなさそうね。私の名前は中村ゆりよ。呼び方は何でもいいわ。ところで…遊佐さんだったっけ？ あなたの下の名前は？」

「私は遊佐とだけ読んでいただければ結構です。私には生きていたころの記憶がありませんからそこまでしかわからないのです」

「そう。それは…って今なんていった？ なんかありえないことを聞いた気がするんだけど」

「？ 私はただ生きていたころの記憶があるなんてゆりっぺさんはいいですねといっただけですが…どこに気になる要素がありましたか？」

「ええと、なんかツツコミたいところが増えた気がするんだけど。そんなことより生きていたころの記憶って…私は死んでいるとでも言いたいわけ？」

「はい。そのとおりです」

あっさりとしてこれ先よりも機械的に「死んでいる」ということを肯定された気がする。でも死後の世界ってことは…

「この世界ではもう死なないってk「はい」え？」

遊佐さんは人の話を聞く気はないのだろうか？ ということはさつき見た光景は夢ではなくて、私が生きていたころに体験したこと…と

「どうしました、ゆりっぺさん？」

「遊佐さんあと一つだけ聞いてもいいかしら？」

「こほん。この世界では死なないということは…理不尽な神に抗えるということなのかしら？」

「神というものが存在するならば抗うこともできると思いますが、そんなことを考えるのはゆりっぺさんが初めてですね」

「私が初めて？ って言うことはこの世界に来た人は前にもいたってということ？」

「はい。ただ今までにこの世界に来た人はこの世界で、生きていくときにできなかつたこと、遣り残したことをこなし満たされて消えていきましたが」

「え？ 消えていくって…？ どういうこと？」言葉通りの意味です。この世界から存在そのものが消えてしまいます。もともとこの世界は生きていくときに未練を残したまま死んだ人が来る世界なので「なんで私の話をさえぎるのよっ！」

そうだ、私は生きてるとき守るべきものをたつた三十分ですべて失った。それから私は私の妹や弟に理不尽な死を与えた神を憎んだんだ。これはチャンスじゃないのかしら？ あるとき理不尽な運命を押し付けた神に対する復讐をする。

「遊佐さん、私が今から『神に抗うための戦線』を作ると言い出したらあなたは…仲間になってくれるかしら？」

「はい。よろこんで」

こうして私は「神に抗う」という私自身の目的のためだけに死後の世界で戦線を作り上げた。

d e t e r m i n a t i o n (前書き)

時間はかかりましたが第二話です。

この回からタイトルをアニメに沿ってやっていきたいと思います。
まあ語彙が乏しいので、どこまで続くかわかりませんが。

d e t e r m i n a t i o n

死後の世界でも戦争をする。しかも相手は人間じゃない。……神だ。神なんてものが実在するかは眉唾ものだけれど少なくとも私はその存在を信じている。崇拜の対象としてではなく、戦うべき敵として。だから私は……この世界で神に抗う。汚くても、はいつくばつても、どんなに後ろ指を指されても私は抗い続ける。私はこの世界でそう決心した。

E p i s o d e 2 d e t e r m i n a t i o n

この世界の学生の大多数は、意思だけは持っているただの作られた存在なのだという。わかりやすく言うのならゲームの世界で言うところの村人A、俗に言うNPCというところか。ただ違うところは、テンプレートな決められた言葉を返すだけではなく、普通に会話が成立するし、ごく一般的な感性も持ち合わせているというこ
とだけ。

ごく少数の私や遊佐さんみたいな学生ももちろん存在する。こちらには作られた存在などではなく人生という物語の主人公となりうるべき存在。ただ私たちにも大きく分けて二種類のタイプが存在するらしい。一つは私みたいに「記憶を持って来る人」もう一つが遊佐さんみたいに「記憶を持ってこない人」この二種類だ。これは死んだときの死に方に関係するらしい。

死に方。例えば交通事故とかで頭がなくなった場合は記憶がない場合が多いらしい。それ以外は大体が死んだ時の状況、死に方まで記憶に残ることになるらしい。この世界では私たちは死なない。まあ当然といえば当然なのだろう。すでに一度死んでいるんだし。た

とえ死ぬような傷を負っても放っておけば自然と治るらしい。

そしておそらくこの世界でNPC以外の私たちのような人たちにとつて一番重要なことは「この世界からある条件を満たせばこの世界から消えていける」いいかえれば、神によって消されるといこと。神にさえ抗わなければこの世界から消えていけるらしい。消えるといつても普段使うような意味ではなく、元の世界に戻れるといことだ。…どんな姿で戻れるかはわからないが。

というのもすべて遊佐さんから聞いたこと。むしろ遊佐さんがどうしてこんなにかの世界に仕組みを知っているのかすごく気になるけど、遊佐さんは教えてくれなかった。

「とりあえず神と戦うための組織とはいえ、戦線の名前もなければ戦うための武器もない。ましてや私と遊佐さん二人だけだし…とにかく仲間を集めなカードサツ」…」

と私がさつき遊佐さんから聞いたこの世界の情報を反芻し、独り言を呟きながら学校の中庭を歩いていると後ろで人が倒れていた。

(ええーちよつと待ってよ。NPCも倒れることってあるの!?!? でももしNPCじゃなかったら助けたことを口実に戦線に入ってもらえるかもしれない…よし。そうと決まれば)

「だっ大丈夫ですか? 生きてますか? 記憶はありますか? もしかして死んでる? ってこの世界で生きてるかとか死んでるとかってないじゃない。でもまあこのまま放置してわけにもいかないだろうからとりあえず保健室に連れて行きますか」

とりあえず倒れている人を保健室まで連れて行くこととした。けれ

ど、よくよく見たら男子生徒だ。

「って運べるかー！ 明らかに無理じゃない。体格差がありすぎるわよ。しょうがないからここで目を覚ますまで待つてよ。いろいろ考えたいこともあるし」

どれぐらいの時間がたったのだろう。ひどく長かったような気がする。授業の始まりと終わりを知らせるチャイムの音ももう鳴らない。

「はあ…この世界に来て早々授業にまったくでないなんて…私はとんだ不良生徒ね。それにしても起きないわね。一発殴れば起きるかしら」

と、とりあえず一発殴ろうと拳を振りかざしたら…

「はっ…ここは？ なんで俺はこんなところで寝ているんだ？ まったく何も思い出せない」

起きた。これ以上ないベストなタイミングで。いかにも寝たふりで話を全部聞いてましたよ的なタイミングで目を覚ました。とりあえず横で混乱されてもウザいだけなので、私は真実を教えることにした。

「目は覚めた？ ようこそ。死んだ後の世界へ。早速だけどあなた戦線に入隊してくれないかしら？ 私を含めてまだ二人しかいないから入隊してくれると助かるんだけど。あ、そうそう戦線の名前も考えといて。まだ決まってないのよね」

「死んだ後の世界？ 戦線？ あんたは何を言ってるんだ？」

「何をつてそのままのことよ。あなたは元の世界で死んだの。で、その世界で遣り残したことがあるからこの世界に来たわけ。順応性を高めなさい？ そしてあるがままを受け止めるの」

「じゃあ戦線つてのは？」

「そのまんまよ。この世界で戦うための組織よ。まあまだメンバーは二人しかいなし、名前もまだ決まってないけど。あんたも考えときなさいよ」

「なにと戦っているんだ？」

「そりや神様に決まってるじゃない」

「本当に神なんてものがこの世界は存在するのか？ そして神を倒して何をするんだ？」

「いる。と私は信じているわ。運命というもので私たちのことを翻弄し、慌てふためくさまを見物している性悪な神様が。そして神を倒してこの世界を手に入れるの。あなただってそうでしょ？ あなたは記憶がないのかも知れないけど、元の世界で不本意な死を遂げていることは確かなこと。あなたの記憶を取り戻すためにも一緒に戦って欲しいの」

「俺の記憶を取り戻す…そんなことができるのか？」

「できるかどうかなんてやってみなきゃわからないじゃない。それともあなたは抗いもせず消される道を選ぶの？ 人間に生まれ変わ

れるなんて保証はないのよ？ それでどうするの？ 戦線に入る？
それとも消える？」

「……………OKわかった。であんたの名前は？」

「私の名前はゆり。中村ゆりよ。この戦線のリーダーよ。あなたの
名前は？」

「俺の名前は…北…北大路…」

「下は？」

「思い出せ…ない」

「まあ記憶を取り戻していくにつれて思い出していくでしょ。じゃ
あ改めてよろしく」

と私は手を伸ばした。そして彼は少しためらいながらも私と握手
をした。

d e t e r m i n a t i o n (後書き)

長かった。やっとオリキャラを出すことができました。

不定期更新ですが年内はあともう一つくらいかければいいなと思っています。

e x i s t e n c e (t h e f i r s t p a r t) (前 書 き)

第三話です。

前編が存在すれば後編も存在します。

というわけで、まずは前編をお楽しみください。

e x i s t e n c e (t h e f i r s t p a r t)

とある病院の一室。ここで今まさに息を引き取るうとしている一人の少女がいた。彼女は生まれつき心臓が弱く、十歳のとき余命一年と宣告された。だが、偶然起こった大規模な列車事故で仮死状態のまま死亡した少年の心臓を移植された。だが…長くは持たなかった。

彼女は自分が息を引き取る間際、弱りゆく自分の心臓の鼓動を聞きながらこんなことを考えていた。

(そっか…もう駄目なんだね私。せめてもう少しだけ生きていたかったな…学校にも行きたかったし、友達も…たくさん欲しかったな…この心臓をくれた人にもありがとうを言いたかったな…天国に行ったら、学校に行ったり、友達をたくさん作ったり…できるかなあ)

こうして、彼女は「この世界」で息を引き取った。そして……

E p i s o d e 3 e x i s t e n c e (t h e f i r s t p a r t)

「とりあえず、これで戦線のメンバーは三人か。もっと増やさなきゃって…聞いているの？あなたたち」

ここは教室の中。今のところここ意外に落ち着いて話せるところがないからここで話してはいるんだけど…流石に騒がしい。

「まずは戦線のメンバー集めよりも、落ち着いて話せる場所探しか
r…」ゆりっぺさん、とりあえず一般生徒が近寄らない落ち着いて
話せる場所があるのですか？」「…って早くそれを言いなさいよ！
！」

「いえ、なんかゆりっぺさんが悩んでいるのがとても面白く見えた
ので、あえて放っておいたのですが…」

「遊佐さんって何気に性格悪いn…」「ありがとうございます」「って
ほめてないわよっ！ とにかく、その場所とやらに案内してくれな
い？」

三分後、私たちは（といっても私と北大路君しかないのだけれ
ど）遊佐さんに案内された場所を見て驚いた。

「校長室かよっ！」「」

「校長先生は？ この学校にはいないのかよ」「」

「いえ、いますが彼は校長室よりも職員室のほうが好きみたいで、
いつも職員室にいます。」「」

「まあいいわよ。どこでも。落ち着いて話すことに使えるのなら。
で、なにw…」

ピンポンパンポーン

ただいまより緊急の全校集会を行います。

生徒の皆さんは、速やかに体育館へ集合してください。繰り返し
ます……

「ますます元の世界の普通の学校みたいだな。全校集会まであるのかよ…どうするんだ？」

「とにかく行ってみましょう。話すのはそれからでも遅くはないわ」

体育館。この学校の規模に相応しく作られたこの場所は、校長室から反対の場所にあり、私たちがついたときには全校生徒が整然と列を成していた。とりあえず私たちは自分のクラスの列がどこなのかさっぱりわからなかったので、後ろのほうで話を聞くことにした。

「では、校長先生のお話です」

「えー、この学校には生徒会長が長らく不在でした。そのため、生徒会自体存在しませんでした。ですが、今回の職員会議で生徒会長と生徒会の発足が決定されました。新たな生徒会長は橘奏さん、そして生徒会長補佐は直井文人君です。では、挨拶を」

「皆さん、初めまして。このたび生徒会長に就任しました橘奏です。よろしく願いいたします」

「生徒会長補佐に就任した直井文人です。よろしく願います」

「では、以上で全校集会を終わります。各クラスに戻ってホームルームの準備をしてください」

「私たちには関係ないわねって…どうしたの遊佐さん。なんか考えているようだけど」

「いえ、何でもありません。私たちも校長室へ戻りましょう。この世界についてまだ話していないこともありますし、北大路君にも話

さなければいけませんので」

私たちは体育館へ来たときと同じ道をとおり、校長室へ戻った。そこで遊佐さんからこの世界の仕組みを改めて聞いた。

NPCのこと、記憶のこと、元の世界に戻ること……この辺は主にまだこの世界に来たばかりである北大路君向けの説明。私が初めて聞いた情報といえば、製造法さえ知識として知っていれば、土くれからでも武器が作れることと、NPCと元の世界から来ている人の見分け方。これですべてらしい。

ちなみに、NPCと人の見分け方は大きく分けて二つあるらしくて、一つ目は、一度殺してみることに。NPCは消滅するだけだが、人であればまた生き返るから。二つ目は、名前を記憶しているかどうか。これは北大路君みたいに生前の記憶がなくても、苗字だけとかで記憶しているのだという。

「じゃあ、この学校の中にはまだ私たちみたいな人もいるってこと？」

「と、私は前回ゆりっぺさんに話したはずでしたが。もう忘れたのですか」

「わるかったわね。ってそんなことより、戦線の名前を決めましょう。勧誘するのに名前がないのは格好がつかないじゃない。それになにかいい案はないの？」

「死んだ世界戦線。縮めてSSSでいいんじゃないか？」

クラススリーエス

「なんかそれ、横文字だとカッコいいけど……まあいいわ。他にいい

案も浮かばないし、当分はそれで行きましよう。そうと決まれば、明日から勧誘するわよ」

このときまで、私と北大路君はこの勧誘がうまくいく、そして同じ志を持つ戦線の仲間が増える、この世界でなら、誰にも邪魔をされないと思っていた。だけど…この世界でもそんなことが上手いくはずもなかった。

e x i s t e n c e) t h e f i r s t p a r t) (後書き)

ついに、天使が登場しました。アニメで最初から名前を知っている
ようなことを言っていましたので、あえて紹介する形にしました。

次回は後編になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7762y/>

Angel Beats!

2011年12月15日02時51分発行